

# 史上初「ロジスティクス大賞」連続受賞 ドライバーの長時間労働削減に寄与

大塚倉庫が日本ロジスティクスシステム協会主催2016年度「ロジスティクス大賞(\*)」を受賞した。15年度に続く2年連続の大賞受賞は史上初。ドライバーの長時間労働削減に寄与する「ネット予約」や「e-伝票」の仕組みを、納品先の卸企業も巻き込み実現したことが評価された。(進行役:本誌編集部)

\*ロジスティクス推進に向けて優れた実績を挙げた企業を顕彰する表彰制度。ロジスティクスの社会的浸透と、ロジスティクス部門関係者の意識高揚を図ることを目的に1984年に創設された。

## 物流の「当たり前」を疑う

大塚倉庫が「物流のあたりまえを壊す」<sup>①</sup>「e-伝票」の仕組みを写真とネット予約で労働時間を変える」と題した論文で、昨年度に続き2016年度の「ロジスティクス大賞」を受賞しました。

大塚倉庫 濱長一彦 社長「物流の『当たり前』を壊そうという、当社のいわば『非常識』な仕組みが社会性の高いものとして認められたことを大変光栄に感じています。前回の15年度大会で当社は、『共通プラットフォームの進化』2回転配送を実現してトラック不足を解消する仕組み」と題した論文で大賞を頂きました。これは『ID運輸』と名付けた当社独自の自動配車システムを使ってトラックの動態を可視化し、配送パートナーの配送効率向上を支援するものでした。今回はこのID運輸を活用して、ドライバーの長時間労働の改善に取り組みました」

「その手段の一つが入荷トラックの『ネット予約制』です。荷卸し待ちの解消を狙っています。荷卸しの時間調整のために長時間待機しているトラックが、物流センターはもちろん街中にもあふれ返っています。荷卸しは『早いモノ順』、トラックがセンターに到着した順というのが慣習になっているからです。そこにメスを入れました。これと並行して『e-伝票』の仕組みを構築して入庫時の検品を廃止しました。スマホを使って納品伝票と受領印を電子化し、納品した商品の写真も撮って数量の



大塚倉庫 濱長一彦  
代表取締役社長

過不足や瑕疵を後からでも確認できるようにしました。これもまた、『出荷する時に検品しているのになぜ納品する時に改めて検品する必要があるのか』と、これまでの常識を疑ってみたことで大幅な改善が実現しました」

「同じ会社が2年連続で大賞を受賞するのは今回が初めてです。主催者側では、この結果をどう評価されていますか？」

日本ロジスティクスシステム協会(JILS)橋爪茂久 専務理事「連続受賞は相当に高いハードルだと思いますが、学識経験者をはじめとする専門家によって組織したノミネート委員会と選考委員会が、あらかじめ定められた基準に従って厳正に評価した結果ですから、大塚倉庫が最優秀であったことは間違いありません。賞の選考にわれわれJILS自身も介入する余地は全くないのですが、個人的にも大塚倉庫が論文を通してドライバーの労働環境改善という業界全体の課題の解決を強調されていたことに感銘を受けました」

大塚倉庫・濱長「当社は物流会社であると同時に大塚グループの物流部ですから、安定供給が何にも増して重要な使命です。ただし、



日本ロジスティクスシステム協会  
橋爪 茂久 専務理事

当社自身ではトラックを所有せず配送業務はパートナーに委ねている。そのパートナーが現在、ドライバー不足で大変な苦境に立たされ、サプライチェーン上の矛盾が最終的に現場のドライバーにしわ寄せされています。それに対してわれわれはメーカーとして何ができるのかという問題を常に考えてきました」

JILS・橋爪「安定供給が物流の最大の使命であることは今も昔も変わりません。それをいかにリーズナブルに実現するかを、われわれは常に問われてきました。ただし、リーズナブルというのは、単に運賃を安くすることではありません。支払うべきところにはきちんと支払う。その上で生産性を上げていく。そのためにロジスティクスを高度化していくというのがJILSの立場です」

―― 荷主の意識は変わってきましたか。

JILS・橋爪「まだまだ十分とは言えませんが、運送需給がひっ迫して、運ぶのを断られるケースまで出てきていますから、意識せざるを得ません。『運送会社を選ばれる荷主になるために、何をすればいいのか』と考える人が増えてきたと感じています。ロジステ

クス大賞の応募論文にも、ドライバーや庫内作業員の人手不足を荷主サイドから改善しようとするアプローチが目立ってきました」

大塚倉庫・濱長「それを可能にするテクノロジがどんどん身近になってきていることも大きいと思います。ただし、B to Cと比べB to Bは動きが鈍い。ネット通販会社と宅配会社を手を組んで宅配ロッカーを普及させたり、先日もエレクトロニクスメーカーがスマホを使って遠隔操作で自宅の鍵を開けて荷物を受け取る仕組みを開発したりと、B to Cの物流では業界の枠を超えたサービスや技術の開発が急速に進んでいます。しかし、B to Bは昔ながらの改善活動には熱心でも、物流の構造自体を変えるような革新があまり見られない」

### 取引先を巻き込み全体最適化

JILS・橋爪「ロジスティクスの革新を実現するには、単価の低減や積載率の改善というところから一歩踏み込んで、サプライチェーンを一気通貫で見渡し、全体最適によって生産性を上げる方向に進んでいくことが大事です。そのキーワードとしてJILSでは最近『連携』という言葉を意識して使っています。この大塚倉庫の取り組みも、納品先である卸まで巻き込んで新しい仕組みを構築したところが大きな評価ポイントだったと思います」

大塚倉庫・濱長「ネット予約制とe-伝票はいずれも大塚グループの工場と物流センター間に導入して成果を立証した上で、川下のセンターに展開していったのですが、卸に提案

した当初の反応はまさに『絵スキャン』でした。『言っていることは分かるが、紙の伝票は要る』『大塚だけ別扱いはできない』と。『10年早い』とも言われました。しかし、とても10年など待つていられません。それに当社はメーカーの立場にいるから、まだ卸にも話を聞いてもらえますが、一般の運送会社が納品先に『ドライバーを早く帰してほしい』と言ってもまともに相手にはしてもらえないでしょう。そこはわれわれがメーカーとしての役割を果たすべきところだと思います」

「そこですは当社は50%近い物量シェアを持つ医薬品物流にターゲットを絞り、かつ最大の物量を取り扱っている卸企業さんにお願いして、念のためe-伝票だけでなく紙の伝票も並行して届けることで協力を取り付けました。その結果、それまで約50分かかっていたドライバーの平均滞留時間が約15分に短縮されました。卸側でも伝票を電子化したことで、納品情報のトレースがいつでも簡単にできるようになり、伝票処理や保管の手間からも開放されたと高く評価いただきました。そうした先行事例を作ったことで今では医薬品だけでなく一部の飲料卸との取引にも同じ仕組みが広がっています」

JILS・橋爪「昨今のドライバー不足を受け、行政サイドもトラックの待機時間や荷卸し作業の問題に注目するようになっていきます。今回、大塚倉庫が発表したような社会性の高い取り組みが、ロジスティクス大賞の授賞によってさらに後押しされることを願っています」

